戦前・戦中の日本人作家による
南方表象の研究—インドネシアを中心に
（要約）

Dewi Anggraeni

本論文は、太平洋戦争開戦前から戦時中にかけて南方を訪れた日本人作家の南方表象の諸相を考察したものである。本論文においては「南方」を、欧米列強による植民地化につづいて、太平洋戦争中から日本の敗戦にかけて日本軍に占領された東南アジア地域を指す概念として使用した。南方への移動と日本近代文学の関係性を論じた従来の研究は、日本人作家の南方への移動をとりまく日本の歴史的背景や作家にとっての南方体験の意味を検討したり、日本近代文学の定義を考え直すために南方への移動と当時の文学場の状況を重視してきたことに窺えるように、「日本の視点」に焦点化されてきたといえる。南方の歴史的状況を考慮する研究であっても、南方に在住する人々を均質的な社会的集団とみなし、先住民のみに着目するという傾向がある。このような研究潮流とは異なり、本論文は日本人作家が体験した南方をヨーロッパの植民地であったと同時に日本帝国の拡大の目的地でもあったという、1930 年代から 1940 年代にかけての「南方」の地理的位置づけを重視し、また、ヨーロッパ植民地主義によって南方に在住する人々が人種及び階級の差異によって分離されていたという、南方の社会的状況を重視する。研究対象は、戦前から戦中にかけて南方を訪れた日本本土生まれの 7 名の日本人作家たちによる、当時の南方の状況を克明に描写した 7 つの作品である。Mary Louise Pratt の「接触領域」という概念を理論的枠組みに据えて、「移動」と「帝国」という観点から、それぞれの作品における南方表象を分析した。

本論文は序章、2 部 7 章から成る本論、終章から構成される。第 1 部では、戦前に英領マラヤを旅した金子光晴と蘭印を旅した高見順の作品を考察対象とし、人種間の相互作用に起因する両地域の多様性の問題に焦点を当てた。英領マラヤと蘭印の歴史的文脈とテクストを結び付けることで、下層階級に属する在留邦人・華僑・先住民のみに向けられる金子と高見の関心がいかに生じたのかについて分析し、その同時代言説における布置を明らかにした。 第 1 章では、金子光晴の紀行文『マレー蘭印紀行』（1940 年 10 月）におけるからゆきさん、ゴム園の下層労働者として働く華僑とマレー人の貧しい生活の描写を分析した。本作品で金子は英領マラヤのリアリティを活写することに成功しつつも、華僑とマレー人を表現する際にはイギリスの人種的偏見を再生産していることを問題化した。また、金子の南方表象が、南方に対する西洋の植民地主義を批判すると同時に、西洋の眼差しで南方人を捉えるという太平洋戦争開戦前に流通していた南方表象と共鳴している点も指摘した。第 2 章では、高見順の短編小説「諸民族」（1941 年 7 月）を考察した。日本人と蘭印の〈劣等人種〉の間に起こる「見る・見られる」行為に着目し、自らを「文明人」として位置づけようとす る日本人の立場が、近代性を内面化した先住民に見つめ返されると不安定化される過程を浮き彫りにした。たしかに語り手は現地人に対する人種的偏見を内省しているものの、彼らの「非文明的」な側面のみに目を向け近代性を視界から消してしまう点で、小説における「大東亜共栄圏」への批判は曖昧なままに留まっているのである。

第 2 部は、太平洋戦争中に大東亜共栄圏の宣伝任務を遂行すべくインドネシアに派遣された寒川光太郎、佐多稲子、阿部知二、北原武夫、間宮茂輔という 5 名の南方徴用作家の作品を考察対象とした。とくにオランダの植民地政策によって生みだされ、その支配が終わってもなお残存した人種間の対立の問題に焦点を当ててテクスト分析を行った。蘭印時代の人種の分離に

基づく「階級社会」という歴史的文脈を考慮しつつ、作家たちが被植民者である欧亜混血人と先住民階級の一般庶民をどのように描出したのかについて検討した。第 3 章では、カリマンタン島に派遣された海軍報道班員の寒川光太郎の短編小説「黒い瞳（マタ・イタム）」（1943 年 8 月）を取り上げた。日本人収容所という舞台設定と欧亜混血人及び先住民という蘭印時代に〈劣等人種〉とされた主要人物の役割を分析することで、本作品では〈劣等人種〉が相互に反目し、自身を強者に位置づけて互いに序列を付けあうという植民地のリアリティが描き出されており、インドネシアが多人種間の力関係を表出させる場として機能していることを明らかにした。第 4 章では、ジャワ島に派遣された陸軍報道班員の阿部知二の従軍エッセイ「血と土と心―エルベルフェルトのことなど」（1944 年 7 月）における、〈ピーテル・エルベルフェルトの反逆事件〉の再構成を検討した。18 世紀のバタヴィアで起こったピーテル・エルベルフェルトによる反逆事件を再構成することで、阿部はインドネシアにおける欧亜混血人のアイデンティティの揺らぎを描き出し、アイデンティティが定まらない欧亜混血人を生来的な「裏切り者」として描いていると主張した。また、こうした欧亜混血人の描写には、日本軍政下で西欧人に対する白人純血主義に基づく分離政策が欧亜混血人のアイデンティティを流動化していたという状況が背景にあることを指摘した。

第 5 章では、陸軍報道部に斡旋されスマトラ島へと渡った佐多稲子の短編小説「髪の歎き」（1943 年 9 月）を考察した。本作品が「大東亜共栄圏」のプロパガンダの役割を果たしたことは明らかであるが、蘭印時代から日本統治時代にかけて欧亜混血人と華僑が一貫して植民地空間から「他者」として疎外されている過程を描き出している点にも着意すべきである。本章では、疎外の過程でジェンダー化及びエスニック化という二重の排除が行われていることを浮き彫りにした。 第 6 章では、ジャワ島に派遣された陸軍報道班員の北原武夫の従軍エッセイ「インドネシア人の性格」（1943 年 8 月）を検討した。日本軍上陸直前と直後におけるインドネシア人をとりまく状況と関連させながら、「「文字」よりも「実行」」という「大東亜共栄圏」構想に対する北原の姿勢を明らかにした。そのうえで、本作品における「インドネシア人の原始性」という否定的なインドネシア人像の機能について考察した。インドネシア人を否定的に形象化することで、北原は、起こり得る日本軍政への反発といった植民地の実際問題が適切な政策で解決されなければ、「大東亜共栄圏」建設が妨げられるだろうということを明示したのである。それゆえに「インドネシア人の性格」の言説戦略は、「大東亜共栄圏」建設を促進する目的に集約されると論じた。第 7 章では、東部インドネシアに派遣された海軍報道班員の間宮茂輔の従軍エッセイ「基地の生活」（1943 年 9 月）を考察対象とした。間宮は、インドネシア人を「自立性のない者」としてステレオタイプ化する一方で、オランダの植民地政策が生み出した知識人及び民族主義運動というインドネシアの近代性を隠蔽している。それによって間宮は、インドネシア人が自身の力で政治的主体性を獲得していく歴史的過程を不可視化しているのである。終章では、第 1 章から第 7 章までの論点を整理し、各章の解釈をまとめ、研究の限界と今後の課題を記述した。各章の分析にもとづくと、戦前から戦時中の南方表象の諸相を貫くものとして、「欧亜混血人に対する不信感」・「先住民に対する否定的感情」・「インドネシア知識人の消去」という 3 つの傾向が指摘できる。「欧亜混血人に対する不信感」は、「黒

い瞳」・「血と土と心」・「髪の歎き」という徴用作家の作品に顕著である。いずれの作品も欧亜混血人を「信頼できない者」として位置付けているが、このような認識が形成された要因として、日本軍政が実施した、西欧人に対する白人純血主義に基づく分離政策が挙げられる。「先住民に対する否定的感情」は、『マレー蘭印紀行』・「インドネシア人の性格」・「基地の生活」という戦前及び戦中に南方を訪れた作家の作品に一貫して現れる。「インドネシア知識人の消去」という傾向もまた、「諸民族」・「インドネシア人の性 格」・「基地の生活」という戦前及び戦中に南方を訪れた作家の作品に共通している。第二の傾向と第三の傾向には共通の要因がある。すなわち、日本の「解放者」としての自己像を構築するために、日本の助けを必要としている「無力」な存在として先住民を否定的に描写する必要があったと考えられる。このような傾向は、日本人作家たちがヨーロッパ植民地主義によって形成された人種間・階級間 の対立に直面していたことを示しており、日本帝国の一部として南方の社会を組みこむことの困難をも象徴している。日本本土で大東亜共栄圏のイデオロギーが広まっていたものの、実際に南方を訪れた作家たちは、南方が日本・満州・中国の〈兄弟〉として位置づけにくいということを痛感し、人種及び階級の差異によって分離されていた南方では、人種間の親近感が形成されにくかったためである。研究の限界と今後の課題としては、まず、戦後に発表された作品にまで論及できなかったため、今後は戦後作品も含めて、南方を体験した日本人作家による南方観の継続性の有無を検討していきたい。次に、より広い射程で南方表象を検討するため、インドネシア以外の東南アジア諸地域へと移動した作家の作品も検討していきたい。最後に、東南アジアにおける脱植民地化のプロセスと 戦後日本の状況という歴史的文脈を踏まえながらテクストを分析することで、「南方への移動」・ 「帝国」・「文学」の関連性についてさらに研究を進めていきたい。